

中部の

エネルギーを
築いた

人々

日本の電力王・福沢桃介

PART1 中部経済圏の礎を築いた福沢桃介 — その3

大同電力社史に、「福沢桃介氏は人も知る如く、一時は株式界の流星として澁刺縦横の手腕を斯会に発揮した事もあったが之は氏の生涯に取っては極めて短期間の事に属し、…氏の電気事業界入りは実に氏の一念発起に依れるものであって、ただ事業のみが人間の生命を永久に伝え、之を無量壽のものたらしめるとの自覚から、人生の幸福を増進し、世間が感謝を以って迎えるような種類の事業として選び当てたのが電気事業であった。偶々同

窓松永安左エ門氏の主宰する福博電車に関係せるを切掛けとして電気界の人となり、同じく同窓の先輩矢田績氏の手引に依って名古屋電灯会社へ入るに及び、茲に千年開発を待てる木曾川と、是が開発を畢生の事業とする福沢桃介氏とがピッタリ結びつけられることとなったのである。…」と記述されている。

今回は、経営の奇才で日本の電力王の座を登りつめた最終コースを紹介する。

電力王への道(旧：大同電力株式会社)

大同電力(株)は、1921(大正10)年、大阪送電・木曾電気興業・日本水力の3社が大同団結し設立された会社で、桃介が社長に就任した。

名古屋の重化学工業化を図り、木曾川の水力電気を供給するという構想は、第1次世界

大戦後の不況や名古屋経済界での抵抗もあり、思うように進まなかった。そこで関西地方に電力を送る大阪送電と木曾川などの水力開発を目的に設立された木曾電気興業と日本水力が加わって実現されたものである。当時、日本水力は北陸の九頭竜川の水力発電を大阪電灯



1922(大正11)年に建設された大阪変電所本館のモニュメント

福沢桃介の揮毫で「曾水一条雷 浪華萬燭春
—木曾川で雷・電気が起きて、浪華の春は萬
燭で明るく輝く」と記されたモニュメントで、
大阪送電を実現した意義と喜びを表現した。



電力王福沢桃介翁像と川上貞奴女史碑
大井ダムが見下ろせる恵那峡の「さざなみ公
園」には青銅製の桃介翁像と、その横に貞奴
の銅製レリーフが設置されている。

と京都電灯へ電力を供給する卸会社であった。

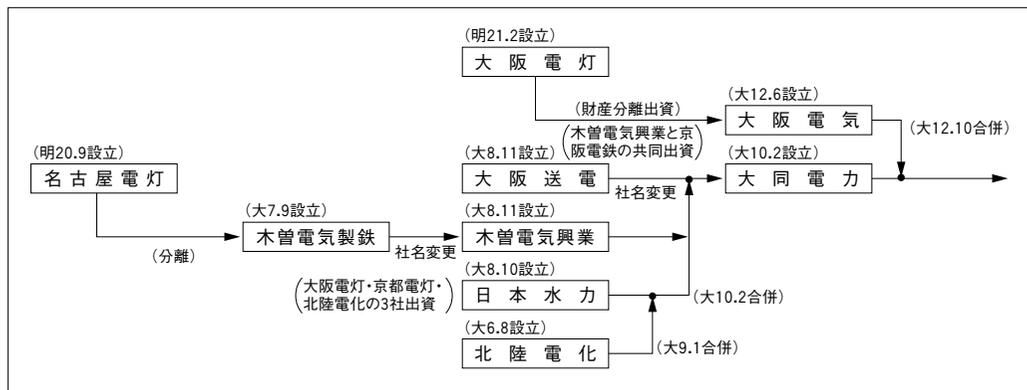
その後、桃介は木曽川を中心に精力的に電源開発を進め、1931(大正6)年から約10年間の間に、7か所(賤母・大桑・須原・桃山・読書・大井・落合)の各発電所を建設した。このなかで1924(大正13)年、木曽川本流をせき止め、日本で初めてダム式(堤高:53_{メートル})の大井発電所(出力:42,900kW)を竣工させた。

この建設には、アメリカ技術顧問団(シーボスター&アンダーソン4名)を招聘し、スチームショベル、ケーブルクレーン、ミキサーなど近代的土木機械を導入した最初の工

事であった。また途中、大洪水により建設中のダムが決壊し、さらに関東大震災によって資金難に陥った。そこで急きょアメリカにわたり、アメリカ有数の財閥シロニード社を通して1,500万ドルの社債を発行することができ工事を完工させた。

このようにして、中部と北陸の豊富な水力電気を関東・関西方面に販売していたが、戦時体制に入った1939(昭和14)年、電力国家管理に基き日本発送電株が発足すると電力設備および付属設備のすべてを委譲して解散した。

資料3 大同電力株式会社沿革図



この経緯は、1940(昭和15)年9月に建てられた殉職者慰霊碑に

「当社は大正8年11月の創立に係り初め大阪送電株式会社と称し後大正10年2月木曽電気興業株式会社並びに日本水力株式会社を合併して社名を大同電力株式会社と改む

抑も当社設立の趣旨は豊富な日本中部の水力主として木曽川及矢作川水系と北陸地方の水力主として九頭竜川及庄川とを開発して之を中京地方並に関東関西両地方に供給するに存し爾来星霜有余孜孜として目的の達成に努め之が補給用火力発電所を始め東西両都及北陸地方を結ぶ送電幹線其の他の建設を進め積年の事項変然として顕れ既設水火力40数万キロワットに購入電力を合わせて大量供給を営為せしが會々電力国家管理の実施せらるるに及び会社の全事業を挙げて之を日本発送電株式会社に移譲し昭和14年4月竟に解散する

に至れり惟ふに当社が我国電力事業の早時期に措て克く斯の大業に膺り以て抑が国家産業の隆興に寄与し使命実行の成果を以て国策に貢奉するを得たるは固より当社の至當とする所より茲に有終の光濟を見るに際し…

昭和15年9月建之

大同電力株式会社代表清算人 増田次郎」と記されている。



大同電力殉職慰霊碑

おわりに・桃介ゆかりの遺産

今まで述べてきたように、桃介の本格的な事業活動は中部圏の礎を築いた時代と言える。これを陰で支えたのが川上貞奴である。

貞奴は、東京日本橋浜田屋の芸者置屋の養女で、幼少より才女の誉れが高かった。明治27年、壮士芝居OPPケーパー節で有名な川上音二郎と結婚した。そして日本の女優第一号としてパリ万国博覧会で大成功をおさめ、アメリカ、ヨーロッパで名声を博した。音二郎の没後、桃介のパートナーとなり、大井ダムの建設事業などに協力した。

貞奴は大正9年、名古屋市東区東二葉町に日本で初めての住宅会社アメリカ屋の設計で二葉荘を建て住まいとした。当時、「二葉御殿」と呼ばれ、政財界人や文化人のサロンとして利用された。さらに、昭和8年、岐阜県各務原市鷺沼の木曾川添いに貞照寺を建立した。

その後、二葉御殿は名古屋市が寄付を受け、



二葉館と応接間

いったん解体保存し、当時の材料・工法を用い創建当時の姿を東区撞木町に復元した。そして平成17年、「文化のみち二葉館(名古屋市旧川上貞奴邸)」として開館した。

まさしく日本の電力王となった桃介は、将来の日本全体の電力に残りの人生を捧げるための本拠を東京に移し、永田町に「桃水荘」を建てた。このころ、松永安左エ門は日本を縦断する大動脈送電線(電圧:220kV)を建設し、周波数を統一して電力を融通する「大日本送電株式会社」を設立する構想を持っていた。そのために桃介は創立委員長に就任したが、時期尚早で日の目を見なかった。

桃介は昭和2年に腎臓の摘出手術を受け、体力の衰えを感じ始め、翌年、実業界からの引退を表明した。大同電力の社長や、兼任していた会社の社長、取締役もすべて辞し、隠遁生活に入った。そして10年後の昭和13年渋谷の本邸で波乱の人生を終えた。



福沢桃介先生寿像

アメリカのユニオン大学から授与されたドクター・オブ・サイエンスの着衣・角帽姿の半身像(彫刻家:新田藤太郎作)。桃介が還暦を迎え、実業家として第一線から辞したのを記念して制作された。

(寺澤安正)